

青年期における時間的展望と信頼感に関する研究

問題と目的

時間的展望 (time perspective) とは、「ある一定の時点の個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」と定義され (Lewin, 1951)、近年青年の人生目標・時間的展望の欠如が、教育や精神病理、職業選択の世界で問題となっている。Erikson (1959) は基本的信頼が、青年期においてより時間展望性をもつものとなり、自らの人生を統合するものとなると述べている。時間的展望と信頼感に関する研究としては、比嘉・岡本 (2007) が、青年の未来展望と信頼感の関連を検討している。

しかし、これまでの研究では調査対象者の学校段階を限定しているものが多く、青年期の全体的な傾向や発達的な変化を捉えるには不十分であると考えられる。また、時間的展望の方向も過去や現在についての検討がなされているものが少ない。そこで、本研究では、中学生・高校生・大学生に対して調査を実施し、過去・現在・未来という観点から時間的展望と信頼感の関連を明らかにすることを目的とする。

方法

1. **対象者**：中学生男女 242 名、高校生男女 251 名、大学生男女 318 名の計 811 名を対象とした。
2. **調査時期**：平成 25 年 6 月～9 月とした。
3. **調査材料**：
 - (1) フェイスシート：性別、学年、年齢
 - (2) 時間的展望体験尺度 (白井, 1991)：18 項目、5 件法で実施した。
 - (3) 信頼感尺度 (天貝, 1995)：24 項目、6 件法で実施した。
4. **手続き**：質問紙を配布し、自己記入式で調査を行った。なお、中学生・高校生は留め置き調査、大学生は集団調査で実施を行った。大学生においては個別の配布・回収も行った。
5. **倫理的配慮**：実施にあたり、東京家政大学倫理委員会の承認を得た。

結果と考察

時間的展望体験尺度及び信頼感尺度について主因子法による因子分析を行った。その結果、両尺度において 4 因子が抽出された。スクリープロットや因子の解釈を考慮し、時間的展望体験尺度では 4 因子、信頼感尺度では先行研究と同様の 3 因子を採用した。その後再度因子分析 (主因子法、バリマックス回転) を行った。信頼感尺度においては、天貝 (1995) の結果とほぼ同様の 3 因子構造が示されたため、「不信」因子、「他者への信頼」因子、「自己への信頼」因子と命名した。時間的展望体験尺度においては新たな解釈を含む「未来展望」因子、「不安定な展望」因子、「過去受容」因子、「現在の充実感」因子と命名した。「不安定な展望」因子については、因子の解釈のため尺度得点の逆転処理をせずに分析を行った。

次に、時間的展望と信頼感の関連を検討するために、各尺度の因子得点を算出し因子間の相関係数を算出した。その結果、特に「未来展望」と「自己への信頼」との間に有意な正の相関が見られ ($r=.406$, $p<.01$)、また「不安定な展望」と「不信」との間にも有意な正の相関が見られた ($r=.434$, $p<.01$)。さらに、「過去受容」と「不信」においても有意な負の相関 ($r=-.384$, $p<.01$) が見られた。これらの結果から、自己への信頼感が強いほど未来への展望が築かれること、不信感が高まるほど時間的展望が不安定になることが示唆される。また、不信感を強く持っているほど過去への方向への時間的展望が築かれにくいと考えられる。現在の方向に関しては、「現在の充実感」と「他者への信頼」の間に有意な正の相関があり ($r=.345$, $p<.01$)、現在の時間的展望には他者への信頼感が関わっていることが示されている。学校段階ごとの相関においても概ね同様の結果が得られた。

今後は、学校段階や性差についても詳細な検討を行い本研究について考察を深めることが課題である。また、本研究と併せて実施した自由記述やインタビュー調査についても分析を行い、青年の時間的展望の傾向とそのプロセスについても検討を行うことが必要であると考えられる。